Photo by
Shoji Sato

特別インタビュー

最新アルバム『ウインド・ハンター』を発表した
真砂秀朗さんに聞く

自然や無意識とつながるデザインを創っていきたい。

「プラネットラブ」などのCDや、「しおのみち」シリーズのプロデュース、ウォン・イン・ツァンさんとの共演で活躍されている真砂秀朗さん。昨年末、4枚目のソロアルバム「ウインド・ハンター」を発表されました。インディアン・フルートの美しい音色が聴く人をやさしく包み込む、素晴らしいCDです。さっそく湘南の葉山で、棚田で米作りもされている真砂さんを訪ねました。生活とアートがひとつになった、とっても素敵な方でしたよ。

聴く人の奥深いところまで響くインディアン・フルート

——新作「ウインド・ハンター」は、どのようなきっかけから作られることになったのですか？

今回のアルバムは、ニューエイジやヒーリング・ミュージックを好きな方々だけでなく、ポピュラーな音作りにチャレンジすることで、ジャンルを超えた幅広い人々に聞いていただける作品にしたいと思いました。

インディアン・フルートの美しい音色をより多くの方々に聞いていただきたいと思いまして。

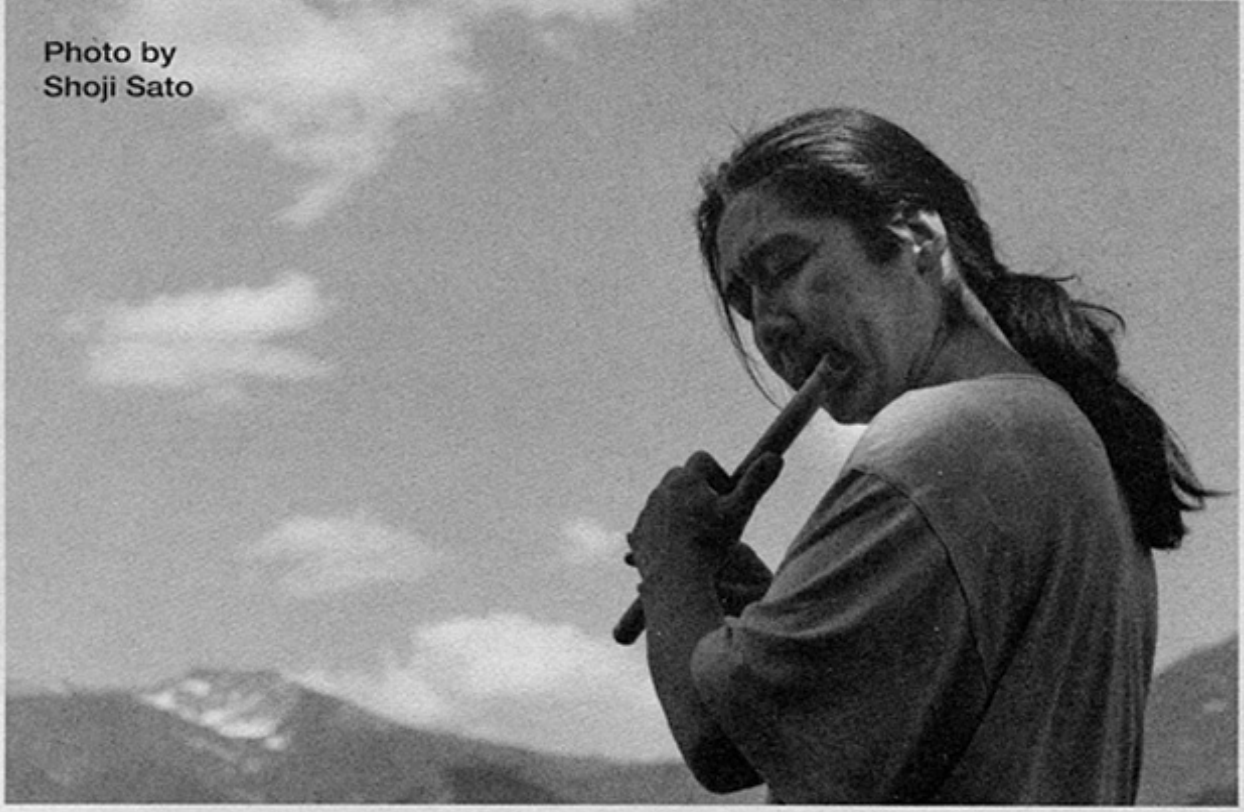

Photo by
Shoji Sato

美意識は、アートだけにとどまらず、ライフスタイルそのものになる…。

——聴けば聴くほど、インディアン・フルートの温かくやさしい音が、からだに馴染んでいくような、気持ちのいい素敵なアルバムですよね。

インディアン・フルートという楽器は、元々からだに馴染むように開発された楽器なんですよ。

たとえば、トランペットのような、コロシアムのような大きな場所で多くの人に聴かせるために作られた楽器とは、まったく対極的に位置する楽器なのです。

目の前にいる人、近くにいる人の本当に奥深いところまで響かせて、聴かせるために開発され、進化してきた楽器なんですね。

ある意味、ハープの世界と似ているのかもしれません。

ハープは一見、とてもマイルドな植物のような感じがしますが、からだや何らかの症状などにダイレクトに効果が作用しますよね。そのような部分が、インディアン・フルートにもあると思うのです。

自然と音楽は深く結びついている！

——人間の肉声に近いような、やわらかい言葉で語りかけられているような感じがします。

響きは、吹く人によって、印象がまったく変わります。実際、先住民の間では、男の人が女の人に「愛を打ち明けるとき」にこの笛を吹いて伝えていたのですから、心の言葉の代わりになる楽器なのだとも言えると思います。

たとえば、特定の目的のために機能をどんどん特化させ、開発された楽器を「白砂糖」だとすれば、民族楽器など倍音がたくさん入っている楽器は「黒砂糖」で、その中でもインディアン・フルートは、思いっきり黒砂糖派に入るでしょうね。

——真砂さんは、ご自分で「田んぼ」を作られていますが、それが音楽に何らかの影響を与えた部分などはありますか？

葉山の棚田で、仲間と一緒に5年間、米作りをしています。全部で4段の田んぼを借りているのですが、そのうちの一段半くらいを僕が面倒見ています。

みなさん米作りというと、けっこう大変なんじゃないかと思われるようですが、実際にやってみると、作業としては誰でもできる、本当に簡単なものなんです。

1年のうち、田植えとか、稲刈りとか、脱穀とか、全部あわせてほんの3週間くらいの時間さえあれば、無農薬の不耕起栽培で、米は作れてしまうのです。

それで約1表半、100kgほどのお米ができますから、毎日きっちり食べても、半年分くらいの収穫になるんですね。

僕の米作りは売るためのものじゃなくて、個人の領域でやる農ですが、実は

PROFILE 真砂秀朗さん

まさご・ひであき◎世界各地のネイティブカルチャーへの旅の中で出会った楽器を演奏しつつ、独自の音楽を制作。同時にヴィジュアルアートの分野でも活動している。1988年「いのちのまつり」の制作参加の体験から、89、90年「ライオンのうた」、91～94年「湯島聖堂Music of NAGA」などのコンサートをプロデュース。90年代「日本人=地球人のアイデンティティ」をテーマにアワレーベルを発足。たびたび訪れた北アメリカ南西部の旅での体験から新たな表現が始まる。インディアン・フルートを生かした新しい音作りを目指して、曲作りや演奏活動を重ね、数々のアルバムをリリース。映画「ガイアシンフォニー」をはじめ、テレビ番組やJAL機内音楽など、さまざまなメディアで楽曲が使用されている。
〈ホームページ〉http://www.awa-muse.com

これが「一石二鳥」どころではなく、「一石何鳥」もの効果をもたらすんです。

自分の食を賄うという直接的な効用ももちろんですが、ほかにも、自分と自然が織り合っていくことを実感できますし、メディテーションやリラクゼーションにもなります。

この地球上で、何かを生み出すことができるのは「自然」だけですよね。人間が作り出したものというのは、自然が生み出したものを利用して、加工しているだけで、生そのものを生み出しているのは、自然だけなのです。

農をやっていると、季節や生命と直接触れることができるので、自然と自分とのバランスが取れるようになります。

とくに、僕が演奏しているインディアン・フルートなどの民族楽器は、自然とつながっていることが不可欠だと感じています。

自分のペースをきちんとそこに形作っておくことで、演奏しているときに、聴く人に何かを伝えることができると思うのです。

メディテーションのような感覚を引き起こす演奏

また、農だけではなく、気功をはじめたことも、演奏に大きな影響を与えていると実感します。

笛というのは、奏者の「息」そのものが伝わる楽器です。そして息というものは、物理的に息を吐くということ以前に、「気」というものがその中には入っていると思うのです。それが気功をやってみて、よくわかりました。

実際に演奏するとき、ただ息を吸って出すだけではなくて、肉体という塊よりも広がった「気」を意識して、吸い込んで出していくと、音の中に「気」がすごく充満していくのです。

その状態になると、僕もすごく気持ちいいし、たぶん演奏を聴いている人たちにも、その気は伝わっていると思うのです。

コンサートでも演奏中に会場が「気」で満ちて、終わったとき、まるで気功を受けたみたいな感じになることがよくあります。

演奏が終わって我に返ったとき、いろいろなものが見えたとか、何かを思い出したという人もたくさんいらっしゃいます。

それは一種のメディテーションのような状態と言えるかもしれません。

人間は、普通の生活をしていたら、思考から離れるということが、一瞬たりともできませんよね。

でもライブやCDを聴くことで、一瞬でもそこから離れることができれば、すごくリラックスできますし、自分で何かを気づくきっかけにもなると思うのです。

インディアン・フルートとは？

インディアン・フルートは、北アメリカの先住民に永く伝わる楽器で、多くの部族の神話の中に「ココペリという精霊が笛を吹くと、大地に草木が生えた」という逸話があるように、彼らの文化において笛という楽器のもつ意味は大きい。

儀式のときや、自然と向き合うとき、また男性が女性に愛を打ち明けるときなどに、笛を吹いた。近代になってネイティブアメリカンの文化が見直されるにしたがい、専門の楽器職人も現れるようになり、楽器として完成されてきた。

地球の無意識につながる美意識をデザインしたい

——最後に、真砂さんは音楽を通して、どんな表現をされていきたいと思われているのですか？

僕は、音楽もヴィジュアルもそうなのですが、無意識的な世界に通じる共通のサインを創っていきたいと思っています。

デザインというものは、そのようなサインを創っていく作業だと僕は思っているんです。

無意識の世界にはいろいろな領域があって、たとえば日本なら、日本人の無意識でつくられているひとつの領域があると思うんですが、僕は、そんな国とか集団を超えた、地球的な無意識の地層を見つけて、井戸を掘り進め、そこから汲み上げたものをデザインしていきたいんですよね。

それによって、何か強制的に人を変えるんじゃなくて、すべての人は無意識でつながっているわけだから、共通のサインになりえるものをデザインしていくことで、何らかの形で共鳴していくことができると思うんです。

でも、そのデザイン、つまり美意識というものは、アートだけにとどまるのではなく、本質的にいえばライフスタイルそのものなのだと思います。

生活すべてがその美意識になっていかなければ、嘘になってしまうと思います。

僕にとっては、音楽もヴィジュアルも、農も、そして普段の生活も、すべてがそういう美意識の現われなのだと思っています。

CD 真砂秀朗さんの最新ソロアルバム

『Wind Hunter(ウインド・ハンター)』
AWCA-010　定価◎2,835円(税込)
発売&問い合わせ◎アワミューズ
http://www.awa-muse.com

今回のアルバムでは、インディアン・フルートの美しい音色を生かしながらも、ヒーリングやニューエイジ系などのジャンルを超えたポップな部分も導入。新たな曲創りやアレンジも積極的に試み、インディアン・フルートの「今」を追求した作品。また、今回のアルバムのために、真砂さんのアリゾナの友人ジムがズニ語の詩を2編書き下ろし、2曲でリーディングを披露している。